

永井隆の「殉教観」

——永井隆における浦上キリシタン「殉教」の「語り」——

三輪 地塩

MIWA Chishio

はじめに

1. 永井隆の「浦上燔祭説」
2. 永井作品の「殉教」についての叙述
3. 永井の死生観
4. 昭和初期頃のキリシタン研究の状況
 - (1) エメ・ヴィリオン『鮮血遺書』と映画『殉教血史 日本廿六聖人』
 - (2) 昭和初期の長崎と二十六聖人記念碑
 - (3) 永井の殉教観に影響を与えた『切支丹鮮血遺書』
5. 永井隆における「原爆」と「原子力」についての理解
おわりに

はじめに

1908年、島根県に生まれた永井隆は、1932年、長崎医科大学の物理的療
法科（放射線科）の医師となり1934年にはカトリックの洗礼を受けて信者
となった。1944年医学博士となるも、1945年6月に白血病として余命宣告
をされるが、そのわずか2ヶ月後、長崎に原爆が投下され、妻を失い、自
身も被爆してしまう。1948年、余生を静かに過ごすため、教会員たちから
寄贈された「如己堂」と呼ばれる二畳一間の小屋に二人の子供たち（長男・
誠一、次女・茅乃）と移り住み、そこで1951年に死去するまで精力的に執
筆活動を行うのであった。

永井隆の主な著作は、『長崎の鐘』『ロザリオの鎖』『亡びぬものを』『乙女
峠』などが挙げられる。彼の名を良くも悪くも高めたのは、「浦上燔祭説」
と呼ばれる言説による。永井隆研究の多くが「原爆」か「浦上燔祭説」に焦

点を当てられたものが多い。永井隆の作品の内容は原子力、原爆、キリスト教信仰に関する事が大半を占めるが、それらとの関わりの中で「キリシタン殉教」についても語られている。本研究の目的は、これまであまり注目されて来なかった永井の「殉教観」に焦点を当て、彼の言う「殉教」とは何であるのかについて、彼の「語り」の中から繙く試みである。

1. 永井隆の「浦上燔祭説」

永井の原爆死者理解を批判的に検討して、最初に「浦上燔祭説」と名付けたのは高橋眞司であるが、これはキリスト教界内外を問わず、批判と賛同に晒され、多くの議論を呼んだ。永井隆の原爆死者理解について示されているのが、1945年11月23日に読んだ「原子爆弾死者合同葬弔辞」、並びに一周年記念の1946年8月9日に読んだ「浦上合同慰霊祭祭詞」である。高橋はそれらの弔辞・祭詞にユダヤ教の「焼き尽くす献げもの」＝「燔祭」を取り上げ、これを「浦上燔祭説」と呼んだのである¹⁾。

批判者たちの論は、永井の原爆に対する思想は、GHQとの親和性、原爆投下の責任隠蔽、被爆の実態の歪曲、そして過去の悲劇を情緒的に美化する大衆の馴化を招いた²⁾、というものであった。このような批判は、現在も続いており、「怒りの広島、祈りの長崎」という括りで呼ばれるものの、広島が市内全域の被爆であったのに対し、長崎は北地区半分に限定された被爆であったという被害状況からも、必ずしも長崎住民のコンセンサスが得られているとは言い難い³⁾。そのため永井の論は賛否が問われるものとなっているのである。

2. 永井作品の「殉教」についての叙述

この「浦上燔祭説」が、永井の思想全体の中でどのような位置にあり、また、永井における「殉教観」が、燔祭説と如何なる関係性を持つかについて、永井の叙述や彼の著作中に現れる「殉教」の「語り」を幾つか挙げてみ

たい。まず、投下直後の11月23日、永井の原爆死者の宗教的解釈が初めて公にされた時の弔辞、「原子爆弾死者合同葬弔辞」⁴⁾であるが、そこで以下のように述べられている。

「原子爆弾合同葬弔辞」(1945年11月23日)

終戦と浦上壊滅との間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人間の罪悪の償いとして、日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やさるべき潔き羔として選ばれたのではないのでしょうか。……信仰の自由なき日本に於いて迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかったわが浦上教会こそ神の祭壇に^{こひつじ}献げられるべき唯一の潔き羔ではなかったでしょうか。この羔の犠牲によって今後更に戦禍を蒙る筈であった幾千万人の人々が救われたのであります。戦乱の闇まさに終わり、平和の光さし出ずる8月9日、この天主堂の大前に炎をあげたり、嗚呼大いなる燔祭よ！ 悲しみの極みのうちにも私たちはそれをあな美し、あな潔し、あな尊しと仰ぎ見たのでございます⁵⁾。

ここで永井は、400年前から続いてきたキリシタンの「殉教」の地に住む「羔」(カトリック信者)こそが戦争を起こす人間の原罪を贖う「燔祭」になり得たとし、キリシタン殉教が歴史的な下地となって浦上の「燔祭」が起こったと理論づけている。この弔詞について四條知恵は、浦上キリシタン殉教の精神が、「浦上燔祭説」の基礎となっているとして以下のように述べる。

……燔祭説および原爆被害を浦上のキリシタンが経験した殉教・迫害に続く一連のものとして捉える語りは、いずれも聖なる「浦上」を強調するなかで原爆被害を意味づけるものであり、別けても燔祭説は、永井が作ったロジックを有した特徴的なものあった⁶⁾。

更に、クラウド・クラハトと、克美・タテノ＝クラハトはその共著『鷗外

の降誕祭：森家をめぐる年代記』の「いけにえの小羊」と題する項目の中で、「浦上燔祭説」と永井の「殉教観」について次のように解釈している。

（永井は）如己堂の病床で、絶筆となった『乙女峠一津和野の殉教者物語』（中央出版社）を完成させる。永井はテルトゥリアヌスの受難論を引き合いに原爆投下を解釈し、それは単なる野蛮行為、いわゆるバートランド・ラッセル（Bertrand Russell）のいう「残忍な大量殺戮行為（a wanton act of mass murder）」ではなく、神から課せられた使命、長崎という「いけにえの小羊」を通じて、世界に平和をもたらし、世界をその「罪」から救済するための神の「愛」にほかならなないと判断した彼は、1597年の日本二十六聖人から、明治維新期の殉教者、そしてこの原爆の犠牲者をも「殉教」とみなした。こうした見方は世界から注目される⁷⁾。

翌年1946年8月9日、浦上カトリック教会で行われた慰霊祭で、永井は「浦上合同慰霊祭祭詞」を読むが、前述の甲辞よりも宗教的解釈がやや薄らいているように見えるものの、そこにも長崎原爆死者と「キリシタン殉教」とが関連付けられて語られる。

「浦上合同慰霊祭祭詞」（1946年8月9日）

地上において神より愛される村や町は多けれど、わが浦上のごとく深く神に愛さるる村はありますまい。数々の殉教、不断の迫害、原子爆弾。これらは皆やがて教えを異にする者にさえ、神の光栄を世に示すための試練であったことを悟らしむるものであり、その尊き神の光栄を実現する神聖なる土地として選び給うのがいつも浦上であることを知らしめ給うのであります。浦上を愛し給うがゆえに浦上に苦しみを与え給い、永遠の生命に入らしめんがためにこの世において短きを与え給い、しかも絶えずみ恵みの雨をこの教会の上に注ぎ給う神に、心から感謝を献ぐるものでございます⁸⁾。

この語りについて小西哲郎が「キリシタン時代における迫害とそれに伴う殉教と、原子爆弾の被災とをいずれも『神から与えられた試練』という解釈でもって永井が同列に扱っている点は興味深い」と述べるように、「原爆」と「キリシタン殉教」の思想的連関性をここに読み取ることが出来る。

以上は、原爆投下直後の1945年及び46年頃の永井の語りであった。少し時を経た1950年2月号の『聖母の騎士』に永井は「殉教者の精神」と題するエッセイを掲載しており、ここに彼の殉教観の重要な点が示されている。

「殉教者の精神」(1949年10月頃)

殉教者と言いますと、真に勇ましい人であったと言える感じがします。信じている教えを守って、反対派から殺されても少しも、ひるまなかった人でありますから——。それで殉教をする場合には面を高らかに起こし、大いに胸をはって「さあ、殺さばころせ」と勢いよく敵の刃に、にじり寄って行ったであろうと思われがちであります。近頃は殉教者という言葉は色々の方面で軽々しく用いられています。たとえば政治革命や労働運動等で命を失った人々にも使われ、英雄としてもはやされているようです。そして若い社会運動家や労働組合員の中には暴力革命や暴力騒動の口火を切る事件を自分で引き起こし、英雄的な最期を遂げることによってイデオロギーの殉教者という称号を得て、永く自分の名を名誉とともに残そうとねらっています。

このような態度は真の殉教者と言われましようか？……

カトリックの殉教聖人の一生涯の生活態度、ことに殉教のときの態度は、その伝記を読みますに、凡そこれとは正反対であるように思われます。即ち常に自分の力の無いことを知っており、完全な徳に至ろうと努めながらも自分の次々に犯す罪のためにそれに至ることの出来ないのをなげき、聖母のお取次によって天主の聖寵を常に祈り求める御あわれみによって救われんことをけんそんに願いつづけていたのでありま

す。その殉教の時の態度は、面を天に向けることはあってもそれは天主を讚美し、天主に感謝し、天主の御栄光のために最後まで信仰のくずれないように祈り求めていたのでありまして、それは、決して我は栄光ある殉教者なりといばっていたのではありません。胸に近づく槍を見ても、それと敵の暴力と見ることなく、彼等は何にも知らないのですから、どうか赦してやって下さいと、相手のために祈りながら、そのほこ先を受けたのであります。これからも殉教者はカトリックの中から次々に出るでしょう。そして、それは信仰のためという名のもとに殺されるのではなく、スパイとか民衆の裏切者とかその他さまざま、不名誉な罪名の下にはずかしめられ、なぶられたあげく殺されるでしょう。それを最後まで柔和けんそんに耐え忍ぶことは、天主の掟に全く従順な人でなければ出来ずまい。

私はこう思います。殉教者はけんそんの極致であります、と⁹⁾。

永井のこれらの殉教者像（イメージ）は、何に由来するのであろうか。彼は元々キリシタンとは無関係の「熱心な出雲大社教の家庭」（松江市）に生まれた¹⁰⁾。長崎医科大学に入学する際、浦上キリシタンの末裔である妻緑の実家、森山家に下宿することとなる。幼い頃から自他共に認める「唯物主義者」であったが、尊敬する物理学者パスカルが、「靈魂」という非科学的なものを信じていることや、彼の物理学理論と矛盾なくその思想の中にキリスト教信仰を同居させていることに驚く。それが切っ掛けとなりキリスト教信仰に興味を持ち、1934年6月にカトリックの洗礼を受けた。永井が森山緑と結婚するのは、その2ヶ月後のことであった¹¹⁾。

浦上キリシタンたちは徳川幕府の禁教令以降250年間に亘って潜伏を続けるが、その際教義を伝えるため指導者の「帳方」を筆頭に「水方」「聞き役」などの組織が作られるようになる。この初代の帳方を務めたのが孫右衛門と呼ばれる人物で、以後その子孫が帳方を継承し、七代目ミギル吉蔵まで続くも、浦上三番崩れにて捕縛、獄死し、その後帳方は空席となった。森山緑は、この吉蔵の曾孫にあたる女性であり¹²⁾、浦上キリシタンの中でも中心

的な立場にあったと言える。森山家は「津和野の精鋭」と呼ばれた守山甚三郎とも親戚関係にあり、緑の妹・京子の夫・政光の大叔父が守山甚三郎、という繋がりであった。下宿人だった頃、森山家の西隣には帳方を世襲してきたキリシタンが住んでおり、そこから殉教話を聞いて興味を持ったようである¹³⁾。このように浦上キリシタン殉教についての話を日常的に耳にする機会に恵まれていた永井であるが、「殉教者の精神」の中に「その伝記を読んでみますに」とある通り、永井は書物としての「殉教伝」を何らかの形で知っており、その物語の人物の立ち振る舞いや、死に至る姿などが、彼の「殉教者像」によって描き出されたものと推測される。

3. 永井の死生観

そもそも永井の死生観は如何なるものであろうか。彼は元々内科医を目指していたが、急性中耳炎に九死に一生を得た後、聴診器が使えなくなる可能性があることを見越して放射線医学に進路を変更する¹⁴⁾。自ら希望して選んだ訳ではない物理療法科での仕事によって死の病「白血病」を患うという、不可抗的な力によって運命が左右されたと言える。これが彼に死生観に何らかの影響を与えているかもしれない。永井は、1937年日中事変に衛生隊の医長として従軍していた時、中村旅団長の手術と死について、次のように述懐している。

「隆吉」（隆のこと）は初め、戦場へ出て来たのは死ぬためだと思っていた。どうせ死ぬんだから、ぱっと殺してもらおうと、無鉄砲な行動をした。……戦闘に慣れるにつれ……死なねばならぬ時に死ぬようにと願った。そして人目につくとか、ニュースに書き立てられると言ったような芝居じみた死に方でなく、しみりした、深い意味のある死を恵んでくださるように祈った。……最初はお国のためとなえていた。しかし……結局小さな友のために……生命を捨てるなら、それでよいと思うようになってきた¹⁵⁾。

更に永井は、原爆投下直後に生き埋めにされかねない状況を脱した出来事について「生き埋めとはまた張り合いのない、だらしのない死に方を与えられたものだ」と述べており¹⁶⁾、「死に様への願望」とでも言うべき語りをここに看取することが出来る。この願望は「殉教者のあるべき姿」の語りに反映されているものと考えられる。

4. 昭和初期頃のキリシタン研究の状況

(1) エメ・ヴィリオン『鮮血遺書』と映画『殉教血死 日本廿六聖人』
キリシタンの「殉教」に並々ならぬ思いを持っていたエメ・ヴィリオン¹⁷⁾は、1887年『日本聖人鮮血遺書』(以下、『鮮血遺書』)を著した¹⁸⁾。これはレオン・パジェス¹⁹⁾の『日本廿六聖人殉教記』(*Histoire des vingt-six Martyrs Japonais*, Paris, 1861)²⁰⁾と『日本切支丹宗門史』(*Histoire de la religion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651*, Paris, 1869-70)²¹⁾を基にして書かれたものであり、当時の日本人に殆ど知られていなかった「日本二十六聖人殉教物語」の先駆的な著作であった²²⁾。

『鮮血遺書』は内田魯庵によって広められ、版も重ねられており、それなりの冊数が世に出回っていたと思われる。1926(大正15)年、松崎實は、この『鮮血遺書』を原本にして、大幅改訂・修正を加えた『切支丹鮮血遺書』を出版した。『鮮血遺書』は、1931(昭和6)年の第7版以降、版が重ねられることはなかったため、1930年～40年代、つまり永井隆が長崎にて洗礼を受け、医師として活躍していた時代に広く読まれるようになったのは、改訂版の『切支丹鮮血遺書』と考えて良いだろう。

1931年、ヴィリオンの『鮮血遺書』を原著として、日活映画『殉教血史 日本廿六聖人』が製作・上映された。1931年9月1日の『キネマ旬報』(411号)²³⁾によると、「版權所有及び映画製作権者平山政十」「原作ホイヴェルス博士²⁴⁾」、出演者は「山本嘉一」「片岡千恵藏」など有名な役者が名を連ねる。映画の規模は、「撮影半年、出演人数15000人、撮影費30万円、

ロケ地ローマ」となっており、大掛かりな映画であった²⁵⁾。『シネマ旬報』には「興行価値——すばらしい大がかりな宣傳、その効果が一番聞いてみると思ふ」²⁶⁾と評価されており、キリスト教の宣伝的な効果があったことを作品の意義として挙げている。同映画の原著が『鮮血遺書』であった理由として、山梨淳は「この著書が、大正末期からのキリシタン時代に関する一般の興味の高まりとともに、日本キリシタン史の代表的著作として人口に膾炙されていたため、興行上の宣伝効果の観点から、その知名度の高さが評価されたため」²⁷⁾と述べる。更に、平山政十の「日本二十六聖人」の事績に関する知識は、「他の多くの時代者と同じく」²⁸⁾ ヴィリオンの『鮮血遺書』を通して得られたものと推測される。つまり、ヴィリオンの同著作は「戦前、恐らく最も広範な読者を獲得し、一般に名前を知られた書物であった」²⁹⁾と言われるように、1930年代前半頃に一般的に広がっていた「二十六聖人（殉教の）」イメージは、ヴィリオンの『鮮血遺書』に負う部分が多く、そこに示された「殉教」の場面、或いは「殉教観」が当時の日本に浸透していたと言えるだろう。

平山政十が、同映画作品を制作した理由として「伯父・守山甚三郎の『迫害話し』と甚三郎の信仰態度にあった」³⁰⁾ことを挙げている。浦上キリシタンの家系に生まれた平山は、軍国主義化していく日本社会で、キリスト教徒への偏見が強まる中、同映画によって、偏見が払拭されることを目的としたプロパガンダ的作品ということになる³¹⁾。1930年代初頭のカトリック教会が、キリシタン殉教の日本的性格を強調したことに関して、山梨は「当時の日本人信徒が、自己のアイデンティティをカトリシズムの普遍性の中に解消させることなく、自らの「日本人」性を積極的に訴えることによって、国民として日本社会への一層の同質化を望んでいたことのあらわれ」³²⁾が同作品に現れていると述べている。

このように、エメ・ヴィリオンの『鮮血遺書』は、平山政十によって映画化されることで、「殉教」イメージの広範囲に及ぶ可視化をもたらしたと言える。尤も、どれほどの興行成果を上げ、どこまで広範囲に一般庶民の意識に「殉教イメージ」を定着させたかなどの影響については実証的根拠が十分

であるとは言えない。だが、当時キリシタン研究という営みが一部の研究者によってのみ行われている中で、大正後期から昭和初期にかけてキリシタン関連書の発行や映画による可視化などによって、全国的に「キリシタン殉教イメージ」が民衆化されたと言ってもよいだろう。同時に、永井隆の生きた1920年～40年代は、「信仰を貫いて死ぬ」という「殉教観」が浸透し、カトリック教会内外において「殉教」という行為が一般化した時期であったと考えられるのである。

(2) 昭和初期の長崎と二十六聖人記念碑

戦前戦後の長崎では二十六聖人の「殉教地」を探すことに力が注がれていた。1862年6月8日、二十六殉教者は聖人に列し、その崇敬は特に篤くなる。長崎のプティジャン司教は、それまで忘れ去られていた二十六聖人の殉教地を「茶白山」と推定したが、これに誤りがあり、浦川和三郎司教は正確な場所として西坂公園（現在地）と特定した。1939年、アメリカより300名の信者が二十六聖人殉教地に巡礼する予定であり、西坂に二十六聖人記念碑建設を計画していた。だが、同年ドイツのポーランド侵攻によって第二次世界大戦に入り、巡礼団は中止、記念碑建設もそのまま放置されてしまう。戦後の1947年、二十六聖人殉教350年に当たるこの年に、記念碑の機運が再燃したが、それと同時に、「西坂」に当否をめぐる論争が起こった。浦川説に対して、長崎郷土史家の古賀十二郎は、「筑後町」と推定し、その支持者渡辺庫輔らから強硬な反対が起こった。結果としては西坂説が支持され、記念碑が建設されることとなった³³⁾。

その二年後の1949年、フランシスコ・ザビエルの「来朝400年記念祝典」が盛大に行われた。キリシタン伝来400周年記念を意味するこの式典のために、ローマ教皇庁からギルロイ枢機卿が教皇特派使節として派遣されてきた³⁴⁾。またイエズス会本部からは、ローマのジェズ聖堂に安置されている「ザビエルの右腕」を迎え、記念式典は一層意義深いものとなった³⁵⁾。原爆被害の生々しさが残る浦上天主堂跡で、荘厳なミサが行われ、西坂公園に場所を移し「聖体降福式」と祝典が行われた。その後一団は、鹿児島、大

分、福岡、山口、広島、京都、大阪、奈良、名古屋、湘南と、ザビエル遺跡を巡礼し、全国的な祝祭となった³⁶⁾。長崎の原爆から復興活動が行われる中、西坂を巡る論争や、ザビエルの式典が行われるなど、当時の長崎カトリック界は、ザビエルや二十六聖人などの「殉教者」崇敬への動きが盛んであったことが示される。永井が、このような背景の下で、「殉教」「殉教者」という言葉を使っていることは見逃すことができない。

(3) 永井の殉教観に影響を与えた『切支丹鮮血遺書』

これまで述べてきたように、永井の殉教観形成には、①身近なキリシタンたちとの関わり、②「理想的な死に様」への願望、③キリシタン書籍や映画などの影響、④二十六聖人とザビエルによって賑わった活発なカトリックの動向、などが深く影響していると思われる。

では、永井隆において「殉教」という出来事が、具体的に如何なる「語り」となって表出されたかについて、『切支丹鮮血遺書』が永井隆の著作に及ぼした影響関係を中心に検証してみたい。永井の絶筆となった、津和野キリシタン物語『乙女峠』は、彼の親戚筋にあたる守山甚三郎とその家族の殉教の顛末について語られたものである。ここには物語の中心となる3人「守山甚三郎」とその弟「守山祐次郎」、そして「安太郎」が登場するが、彼らの人物像の描き方や、その語る言葉の中に、『乙女峠』の前年に書かれた『聖母の騎士』(2月号)の「殉教者の精神」で示された“真の殉教者像”が当てはめられているように見える。〔表〕は、『切支丹鮮血遺書』並びに永井隆著作で語られる、殉教者に関する部分を抜き出したものであり、左から出版の古い順に文書を並べている。『切支丹鮮血遺書』はヴィリオンの『鮮血遺書』(1887年)を大幅に改訂した版であると先に述べたが、恐らく永井隆自身が読み、参考にしていたのが、この『切支丹鮮血遺書』であったと考えられる。「……その伝記を読んでもみますに」と語る時の「伝記」とは、つまり、『切支丹鮮血遺書』、或いはこの書を下敷きにして書かれた何らかの切支丹殉教物語であったと考えられるのである。

本稿では、『切支丹鮮血遺書』と永井の文章の中にある類似性、関係性を

(表) 永井隆の「殉教」に関する叙述箇所 対観表

『切支丹鮮血遺書』1925年	『聖母の騎士』（原野録音）1949年
<p>マルチン神弟は高聲に説教を為す耳を澄まして之を聞けば今日我等の死は御主耶穌基督の死に似たり我等なんの功勞ありて斯かる榮福を得たるにや最も天國の食物なる聖體を授り得ざる事は最と残念なれど是は我等の罪いまだ全く尽きざる故ならん我等は罪を告白し最早此世に念なければ將に死に就かんとす然れば御主耶穌基督に倣ひ如何なる嚴刑も受るも克く耐忍し未練の行為あるべからず甲乙よ天主の合力を願へ聖母の取次を祈れ又フランスコ聖人および各自守護の天使を頼み疾く天國に昇られよ必ず傲慢の心を発し我等十字架上に死するを以て罪を許され獨り天國に昇る杯と思ふべからず我等が十字架上に死するは罪の贖ひなりと思ふべし……</p> <p>ポーロ三木神弟は衆人に向ひ今日此処に在る人々よ我が最後の言を聞けよ我は呂宋の人に非ず日本人にしてイエズス會の神弟なり我は罪を犯したるに非ず唯耶穌基督の教を説きたるを以て死刑に處せられるのみ是我深く喜ぶ所にして洪大なる天主の仁恵なり人々よ我が言ふ所を疑ふ勿れ此期に及び何の爲にか虚言を吐くべき實に天主の道の外に人の助る道はなし我之を保証す我等を害する人の爲にも我は天主に祈り恵を受けしめんと欲するなり故に我等を死刑に處すべき命令を下したる閔白を初め我等を死刑に行ふ人々を露ばかりも恨まず彼ら及び日本人民が改心して天主の道を守らん事を望むのみに述べ終て槍を受け……</p>	<p>「殉教者の精神」</p> <p>殉教者と言いますと、真に勇ましい人であったと言える感じがします。信じている教えを守って、反対派から殺されても少しも、ひるまなかつた人でありますから一。それで殉教をする場合には面を高らかに起こし、大いに胸をはって「さあ、殺さばころせ」と勢いよく敵の刃に、にじり寄って行ったであろうと思われがちであります。近頃は殉教者という言葉は色々の方面で軽々しく用いられています。たとえば政治革命や労働運動等で命を失った人々にも使われ、英雄としてもはやされているようです。そして若い社会運動家や労働組合員の中には暴力革命や暴力騒動の口火を切る事件を自分で引き起こし、英雄的な最期を遂げることによってイデオロギーの殉教者という称号を得て、永く自分の名を名譽とともに残そうとねらっています。</p> <p>このような態度は真の殉教者と言われましようか？……</p> <p>カトリックの殉教聖人の一生涯の生活態度、ことに殉教のときの態度は、その伝記を読んでみますに、凡そこれとは正反対であるように思われます。即ち常に自分の力の無いことを知っており、完全な徳に至ろうと努めながらも自分の次々に犯す罪のためにそれに至ることの出来ないのをなげき、聖母のお取次によって天主の聖寵を常に祈り求める御あわれみによって救われんことをけんそんに願いつづけていたのであります。その殉教の時の態度は、面を天に向けることはあつてもそれは天主を讚美し、天主に感謝し、天主の御榮光のために最後まで信仰のくずれないように祈り求めていたのでありまして、それは、決して我は榮光ある殉教者なりといばつていたのではありません。胸に近づくと槍を見ても、それと敵の暴力と見ることなく、彼等は何にも知らないのですから、どうか赦してやっして下さい、相手のために祈りながら、そのほご先を受けたのであります。これからも殉教者はカトリックの中から次々に出るでしょう。そして、それは信仰のためという名のもとに殺されるのではなく、スパイとか民衆の裏切者とかその他さまざまな、不名誉な罪名の下にはずかしめられ、なぶられたあげく殺されるでしょう。それを最後まで柔和けんそんに耐え忍ぶことは、天主の掟に全く従順な人でなければ出来ずまい。</p> <p>私はこう思います。殉教者はけんそんの極致であります、と。</p>

※下線部は、本文中に引用された部分。

『乙女峠』1951年		
守山甚三郎の記事	守山祐次郎の記事	安太郎の記事
<p>甚三郎はその時21歳、もともと負けん気の積極的な性分のうえに、血気にはやる年ごろでもあり、……裁判でも政府役人と議論して負けなかったから、<u>こんななかの小さな藩の役人なんかに負けるものか、という気持ちがあったように</u>みえます。</p> <p>……甚三郎の態度には初めのころは、負けぬ気と、外に見せる勇気とが強く表われ、どんな責め苦にでも立派に耐え忍んでみせるぞ、昔の聖人のような殉教をみごとに遂げてみせるぞという虚栄心があり、高慢ぶったところがあったようです。……それまで強そうなことを言っていた人々はかえって早く役人に負けて転宗し、仙右衛門や安太郎のようなそれまで人目につかなかった人々が、ねばり強く信仰を守りとおしました。安太郎の美しい最後を見たり、仙右衛門の態度を学んだりしているうちに、甚三郎の心も、<u>しだいに柔和となり、態度もへりくだり、祈りと断食が信仰の危機を通りぬける</u>いちばんよい道だと、知るようになったものとみえます。</p>	<p>祐次郎は末子ではあったし、まだ子どもでもあったし、兄の甚三郎などとは違って、どこか弱々しいおとなしい子どもでした。父や兄がこれまでしのぎ通した数々の責め苦の話を聞くにつけても、わたしにはそんな勇気がとてもないと嘆いていました。もし責め苦に負けて、改心しますと口ばしたら、親や兄の名を汚すから、どうかあまりひどいめにあわせぬよう守ってくださいと、絶えず聖母マリアに祈っていました。</p> <p>……まる裸にされ人目にさらされることは、この年ごろではいちばん恥ずかしいものです。布きれ一寸も残らず取り除かれ、人目にさらされるのは、今のような時代ではなかったの、身を切るような北風に吹きさらされるよりも、つらい思いがしました。通りがかりの役人が、いやらしいことばでからかったり、いたづらをしたりすると、内気な祐次郎の目からは涙が出ました。しかし祐次郎は十字架にまる裸でつり上げられたイエズスを思い、人のあなどり、辱しめを甘んじ受ける恵みを願いました。イエズスも、このように布きれ一寸も残さず取られて素裸でした。あとでご絵やご像をつくった芸術家たちが、それはあまりひどいので腰に布をつけ加えました。きのうまで師よ、師よと従っていた幾百か幾千かの市民の前に、素裸でさらされたイエズスを思えば、人通りも少ない山寺で、顔を見られぬ人に見られることは、恥ずかしいといっても不比べものになりません。一心に聖母マリアに願い、聖霊の力づけを祈っていました。ときどき役人がやって来て、どうだ改心する気になったかと尋ねました。寒い風にさされて舌もこわばり、歯ががちがち鳴り、ことばも出かねるので、祐次郎は、いやいやと答えるだけでした。夜になっても、いやいやと答えるので役人も腹をたて、改心するまではそのままで考えろと言いおいて立ち去りました。</p>	<p>その次に三尺牢で責め殺されたのが、安太郎という美しい信仰をもった32歳の人でした。この安太郎は、見せかけはちっとも強そうにありませんでしたが、信仰だけは全く強くて、自分にあてがわれた食物もつとめて人に譲り、たびたび断食をし、また便所そのうじのような人のやりたがらぬ仕事をすすんで引き受け、いつもへりくだって、顔もことばもやさしく、サンタ・マリヤ様に祈りを絶やさない同じ信仰の勇者といっても、甚三郎などは役人にくつてかかるほど自信も強く、堅い背骨を人に見せるほうでしたが、安太郎は真に堅い信仰の背骨をもちながら、それを隠し、いつも柔和けんそんを心がけているほうでした。</p>

示したい。〔表〕には、「二十六聖人の殉教の場面」で長い台詞のある「マルチン」と「ポーロ三木」の言葉を取り上げ、これと永井の殉教観が示された『聖母の騎士（1950年2月号）』の「殉教者の精神」とを比較してみると、その殉教者の描き方の類似が認められる。例を挙げると、「マルチン」の受難場面では、「我等なんの功勞ありて斯かる榮福を得たるにや」「我等が十字架上に死するは罪の贖ひなりと思ふべし」とあり、マルチンが自らに何らの功勞や功績が無いままに殉教の榮光にあずかることと、十字架上で死ぬのは罪の償いであることを語っている。これに対して永井著作『聖母の騎士』の「殉教者の精神」では「常に自分の力の無いことを知っており、完全な徳に至ろうと努めながらも自分の次々に犯す罪のためにそれに至ることの出来ないのをなげき」という言葉に反映されているように思われる。又、「ポーロ三木」の受難場面では、「故に我等を死刑に處すべき命令を下したる閔白を初め我等を死刑に行ふ人々を露ばかりも恨まず彼ら及び日本人民が改心して天主の道を守らん事を望むのみと述べ終て槍を受け」と表現されており、自らの命を奪おうとする者たちのために改心を願う殉教者（ポーロ三木）が、キリストの受難を想起させる姿として描かれている。これに対して永井著作では、「決して我は榮光ある殉教者なりといばっていたのではありません。胸に近づく槍を見ても、それと敵の暴力と見ることなく、彼等は何にも知らないのですから、どうか赦してやって下さいと、相手のために祈りながら、そのほこ先を受けたのであります。」とあり、キリストの受難場面に寄せつつ、敵を憎み、恨んで死ぬのではなく、むしろ敵への赦しを願うことこそが「真の殉教者」であると語るのである。このように、全く同じ言葉をそのまま引用している訳ではないが、永井が描く「殉教者」は、『切支丹鮮血遺書』の殉教者イメージの影響を受けて描かれていることが分かる。

又、〔表〕で取り上げていない『いとし子よ』という著作で永井は、「……あの二十六聖人がはりつけにされるとき、お互いに戒め合った言葉は、『自分は神聖な殉教者の光榮を得るのだとは、ゆめゆめ思うまいぞ』」というのであった。そんな気持ちはすでに高慢心なのであり、高慢心こそはキリスト教徒の心の中の最大の敵であった二十六人は十字架の上で、だれをも恨まな

かった。」と語っている³⁷⁾。これと〔表〕の『切支丹鮮血遺書』にある「我等なんの功勞ありて斯かる榮福を得たるにや」「必ず傲慢の心を発し我等十字架上に死するを以て罪を許され獨り天國に昇る杯と思ふべからず」は、引用ではないものの、『切支丹鮮血遺書』にインスパイアされて書かれたものと捉えて良いだろう。

更に「殉教の精神」に示されている、殉教者の「評価」を基準として『乙女峠』の人物像を評価している事が指摘できよう。特に守山甚三郎は、若い頃「負けん気の積極的な性分のうえに、血気にはやる」性格であり、改宗を迫る政府役人たちに対しては「こんないなかの小さな藩の役人なんかに負けるものか、という気持ちがあった」人物として描かれる。永井において、このような虚栄心に満ちた姿は、「殉教者」の素質がない人物という評価が下される。しかしこのような甚三郎が、弟である守山祐次郎や、共に津和野に流配されていた安太郎らの「美しい」最期を見届ける中で、彼の心は「しだいに柔和となり、態度もへりくだり」、徐々に「殉教」するに相応しい姿へと変化していったと、その心の変化が描かれる。このような記述は、他の津和野キリシタン史叙述には見られない守山甚三郎像であり、永井の特徴であると言える。この〔表〕の『切支丹鮮血遺書』には「けんそん」「柔和」という「語」そのものは見当たらないものの、他の箇所(ママ)に「ペトロ・モレジョン」が殉教しようとする信徒たちへの手紙があり、そこには「……動向の日本人等飽くまで謙遜の心を保ち驕慢の氣を出さぬやう勧め給へ」と書かれている³⁸⁾。総じて、永井の描く、あるべき「殉教者」の特徴は、「謙遜」「謙虚」「へりくだり」であると言ってよいであろう。どれも類似した言葉ではあるが、永井隆はこれらの言葉を自由に用いながら、「へりくだりの殉教(者)」を語ろうとしているのである。

5. 永井隆における「原爆」と「原子力」についての理解

永井は「原爆」に対しては痛みや悲慘さを抱えているものの、原子力技術についてはその将来性と展望に高い関心を持っている。

とにかく偉大な発明だねえ、この原子爆弾は……身をもってその実験台に乗せられて親しくその状態を観察し得たということ、そして今後の変化を観察し続けるということは、まことに稀有のことでなければならぬ。私たちは、やられたという悲嘆、憤慨、無念の胸の底から、新たな真理探究の本能が胎動を始めたのを覚えた。勃然として新鮮なる興味が荒涼たる原子野に湧き上がる³⁹⁾。

又、彼の二人の子供と、次のような会話をしている。

「原子は爆弾のほかに使い道はないの？」

「いいえ、あるとも。こんな一度に爆発させないで、少しずつ、連続的に調節しながら破裂させたら、原子力が汽船も自動車も飛行機も走らすことができる。石炭も石油も電気もいらなくなるし、大きな機械もいらなくなり、人間はどれほど幸福になるかしれないね」

「じゃ、これからなんでも原子でやるんだなあ」

「そうだ、原子時代だ。人間は大昔から……進歩してきて、今年から原子時代に入ったんだ。誠一も茅乃も原子時代の人間だ」⁴⁰⁾。

このような原子力への憧憬は、彼の放射線医療従事者として、心から原子力への期待と夢を乗せて語られたものと考えられる。『原子野録音』には、夢のような原子力の使用例が幾つも出てくる。例を挙げると、「天候の調節が可能になる」「雲を操り、雨を思いのまま降らせる事が出来る」「台風を逸らせる」「寒流と暖流を入れ替えて過ごしやすくする」「大量の熱を得る」「あらゆるものの電化が可能」「予防医学が発達する」「原子薬品で難病が治る」「民族対立がなくなり、世界は一つの国家となる」などである⁴¹⁾。

これらは、原子力に希望を抱いていた時代の言葉であるが、永井も原子力に時代の「夢」としての「万能性」と「偉大さ」を見ていたことが分かる。それは彼の関心を掻き立てると同時に、その思想の中にも影響を与えていた

と考えられる。

おわりに

永井は、爆弾としての「原爆」に批判の声を挙げており、それはあらゆる著作の中に示されている。だが、放射線科の医学博士として、彼は原爆投下後も「原子力」に対する憧憬の念を抱いていた。彼は「原子力」を善的な力の実体とし、「原爆」を悪的な「使用方法」であるとして明確に別けて理解する。更に彼は、科学と信仰をも区別しつつ、「科学は真理を探求することであり、人より発する努力である」と同時に「信仰とは真理を所有することであり、神より発する恩寵である」とも述べている⁴²⁾。しかし不完全な人間が真理を探求しても、あくまでも神に近づく「近似像」⁴³⁾にしかならず、人間が完全な努力を払ったとしても、完全な真理を受ける事はできないとも語る。そのような人間は、善にも悪にもなる「半善半悪のチャンポン玉」⁴⁴⁾であり、いつ何時、どちらに転ぶか分からない存在であるとし、人間をそのような曖昧な存在として理解している。永井の思考は、あらゆる事象に対し、明確な二分化をしつつも、そこには決して相容れない二律背反的な溝があるのではなく、むしろ非常に際どい位置関係の中で存在し合うと捉えており、それは彼の殉教観にも表わされている。永井は殉教者に対して、深い崇敬の念を持っているのであるが、興味深いことに、殉教を「生み出した」迫害者について次のように言う。「(キリシタン迫害史の書物や殉教劇などを見ると) こんなむごたらしい話は、いくらか語り伝えられている。けれども、その中には、キリシタンを英雄扱いするために、ことさら大げさに言い伝えたものがありはしないだろうか？ また、芝居するために、わざとひどく作り上げたところもありそうである。すくなくとも、役人の側、つまりいじめたほうの心の奥は、あの物語や劇にあらわされているほど、血も涙もない鬼かライオンみたいなものではなかったように、私には思われる」⁴⁵⁾。

永井において「殉教」とは、「した」「しない」の二者択一的な行為ではなく、あくまでも善と悪の狭間を行き交う罪人としての人間において行われる

営みの一つであり、そこには「敵」と「味方」という溝もまた不明瞭でさえあると捉えている。

先に述べた通り、彼の「浦上燔祭説」について多くの批判・非難があり、それらはGHQへの親和性、怒りの牙を失ったアメリカ追従の原爆理解、というものであった。だが永井は、「恨みをのんで殉教する」ことは既に殉教の精神を失っていると語るように⁴⁶⁾、原子爆弾という出来事に「恨み」を持ち込まないことによって、「真の殉教者」であろうとしている。永井は日本人とアメリカ人の両者にある罪を見つめる中で、戦争という愚かな出来事が、国境を隔てたどちらかの一方的な責任にあるのではなく、善悪において曖昧模糊とした存在である「人間」の「罪」によって引き起こされた出来事と見做している。だからこそ謙虚さが必要なのだと言っているようである。彼の原子力に対する考えも、善悪二元論的に理解することは出来ない。原子力が未来の希望なのか、悪魔的な暴力なのかは、我々人間がこの巨大なエネルギーに対してどれだけ「謙虚」であるかに掛かっているのだ、と永井は見ている。

彼の「殉教観」は、ここに通底している。あの（日本二十六聖人のような）「殉教者たち」のように、敵を敵として見る視点を捨て、恨みを持ち込まず、生きる命と死ぬ命について謙虚であることを求めている。原爆の死者について語る時、どう死んだか、或いはどう殺されたか、という状況や被害の大きさに注目しがちであるが、永井の関心事は被害の大小ではなく「死の意味」であった。彼の崇敬対象である「殉教者」の「死に様」こそが、「敵を赦し」「へりくだり」「謙遜の極致」であったように、「原爆死者の信徒たちも又然り」と同定している。そこには「燔祭」となった浦上信徒の被害者たちが、敵を恨まず、敵のために赦しを願っているはずである、と考える（あるいは、そうであってほしいと願う）永井の祈りが感じられる。燔祭の信徒たちこそが、永井の願うところの「真の殉教者」なのである、と。

注

- 1) 1950年から70年にかけて、柏崎三郎、田所太郎、本格的批判論の嚆矢となった詩人・山田かんなどを中心に批判が展開された。これら極めて厳しい批判に対し、カトリック界隈から反論の声が起り、片岡弥吉、片岡千鶴子、本島等などによって、永井隆を擁護する意見が出された。四條知恵『浦上の原爆の語りー永井隆からローマ教皇へー』未来社、2015年、48-49頁
- 2) 同書、49頁。
- 3) 同書、54-55頁。
- 4) 「原子爆弾死者合同葬弔辞」は、1945年11月23日に永井隆が「天主教浦上信徒代表」として読んだものである。
- 5) 永井隆『長崎の鐘』サンパウロ、1995年、145-146頁（下線部、論者）。尚、初版は日比谷出版社から1949年に出版されているが、GHQの指示により、日本軍が行ったマニラ大虐殺の記録集「マニラの悲劇」と合本で出版された。
- 6) 四條、前掲書、48頁。
- 7) クラウス・クラハト、克美・タテノ＝クラハト『鷗外の降誕祭ー森家をめぐる年代記ー』NTT出版、2012年、364頁。
- 8) 永井隆『ロザリオの鎖』サンパウロ、1995年、87-88頁（下線部、論者）。尚、初版は中央出版社より1959年に出版されている。
- 9) 永井隆『原子野録音』聖母の騎士社、1989年、55-57頁（下線部、論者）。
- 10) 小西哲郎「永井隆はいかにしてカトリック信者となったか」『長崎外大論叢』(16)、2012年、73-86頁。
- 11) 片山はるひ『永井隆ー原爆の荒野から世界に「平和を」』日本基督教団出版局、2015年、124頁。
- 12) 出典、<http://isidatami.sakura.ne.jp/heiwa3.html>、(2018年9月1日閲覧)。
- 13) 片岡弥吉『永井隆の生涯』サンパウロ、1961年、47頁。
- 14) 同書、61頁。
- 15) 永井隆『亡びぬものを』中央出版社、1948年、263-264頁。
- 16) 永井隆『長崎の鐘』サンパウロ、1995年、19頁。
- 17) Villion, Aimé (1843-1932年)。
- 18) 正確には、彼が毎週教会で語った「日本の殉教者」に関する説教を、加古義一が筆記したものである。松崎實『考註切支丹鮮血遺書』改造社、1926年、10頁。
- 19) Pagés, Léon (1814-1886年)
- 20) レオン・バジェス、松崎實校註『日本廿六聖人殉教記』(木村太郎訳)、岩波書店、1931年。
- 21) レオン・バジェス『日本切支丹宗門史(上・中・下)』(吉田小五郎訳)、岩波書店、上中巻1938年、下巻1940年。
- 22) 松崎實は『鮮血遺書』が世に知られていく経緯について次のように説明する。「鮮血遺書」が有名になったのは矢張り内田魯庵の「獏の舌」が大正九年の秋に讀賣新聞へ連

載された時からであらう。氏は同随筆中の「切支丹迫害」の條下に浦川〔和三郎〕氏の「公教會の復活」とこの「鮮血遺書」とをあげて、此二書はバイブルよりも感動せしめるとまで云はれた。その記事が出ると間もなく、當時カンダの三才社に少しばかり残つてみた「鮮血遺書」が大抵賣れて了へばそれぎり、今では日本國中探し歩いても精々手に入るのは六版のもの位で、初版再版などは拝みたくとも拝めないといふ事である。松崎、前掲書、5頁。

- 23) 小松弘、牧野守監修、佐藤洋編集（復刻版）『キネマ旬報』（第411-415号）、文生書院、2012年、122頁。
- 24) ヘルマン・ホイヴェルス（Heuvers, Hermann 1890-1977年）、上智大学（上智学院）第二代学長としてのみならず、文芸の面でも活躍した。「ホイヴェルス」日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、1276-1277頁。同項目の執筆者は尾原悟。
- 25) 小松、他、前掲書、122頁。
- 26) 同書、87頁。
- 27) 山梨淳「映画『殉教血史 日本二十六聖人』と平山政十 1930年代前半期日本カトリック教会の文化事業」、『日本研究』（第41集）、国際日本文化研究センター、2010年、190-191頁。
- 28) 同論文、191頁。
- 29) 同論文、189頁。
- 30) 平山政十の父平山政吉は、甚三郎の妻タキの弟に当たる。池田敏雄『キリシタンの精鋭 津和野乙女峠の受難者たち』中央出版社、1972年、264頁。
- 31) 山梨、前掲論文、180頁。
- 32) 同論文、195頁。
- 33) 『プティジャン司教書簡集』聖母の騎士社、1986年、189-193頁。片岡千鶴子の解題。
- 34) 永井はこのとき、ギルロイの訪問を受けている。
- 35) 柳谷武夫「戦後におけるキリシタン研究の動向とその文献」『キリシタン研究』（第四輯）、1962年、304-305頁。
- 36) キリスト新聞社『キリスト新聞』（150号）、1949年6月11日。
- 37) 永井隆『いとし子よ』サンパウロ、1995年、261-262頁。
- 38) 松崎實『切支丹鮮血遺書』改造社、1925年、82頁。
- 39) 永井隆『長崎の鐘』サンパウロ、1995年、85-86頁。
- 40) 同書、155-156頁。
- 41) 永井隆『原子野録音』聖母文庫、17-20頁。
- 42) 永井隆『ロザリオの鎖』サンパウロ、1995年、210頁。
- 43) 同書、210頁。
- 44) 永井隆『いとし子よ』、271頁。
- 45) 同書、266-267頁。
- 46) 「……良く名所案内の人が、ここはキリシタンが恨みをのんで殉教した跡、などと説明しているが、あれは教義を知らぬもはなはだしい。恨みをのんで死んだら、殉教者

永井隆の「殉教観」

になれないのである。殉教者というものは、神との完全な一致に有頂天になっていて、そんなちっぽけな人間感情なんかにとらわれない。」同書、262頁。

(本学兼任講師)